

ハイパーサーミアの業務量から見える戦略

原三信病院 放射線科 廣瀬哲雄、寺嶋廣美
臨床工学科 元村哲也、吉村 秀
看護科 井上文江、齊藤まゆみ

はじめに

当院は平成 24 年 6 月から治療を開始し、次年には、業務量は 2.25 倍にまで達した。

(目的)

本報告は、約 2 年間における当院の温熱療法の業務実績とデータ解析、温熱療法を取り巻く内部・外部環境から、①本院における温熱療法の将来性について、②現在の温熱療法のポジショニングから温熱療法そのものの将来性を検討する。

(結果)

検討した結果、引き続き患者数は十分確保できるとともに本年 11 月から稼動する放射線治療装置の効果(放射線治療+温熱療法)を考慮すれば、温熱治療装置の増設も必要となる。温熱療法は 1990 年代の第一ステージ(大学中心)の外科療法、化学療法、放射線療法+温熱療法の競合から、2010 年からの第二ステージ(医療法人中心)に移行している。このステージは温熱療法+低容量化学療法が中心となっている。対象患者はいわゆる「がん難民」であり、各研究分野は新たなポジショニングと戦略の再構築が求められている。①臨床：治療評価に第二ステージのプロトコルの確立、②工学：加温のメカニズムの解明→温熱療法治療計画装置の開発、③基礎医学：温熱療法に最適な低容量抗がん剤の確立、④加温装置メーカー：最大入力 1500W 以上の新たな装置の開発等となっている。